

FIDIC 2006 ブダペスト大会に参加して

はじめに

2006年秋にFIDIC(国際コンサルティング・エンジニア連盟)の世界大会がハンガリーのブダペストで開催され、世界の64ヵ国からエンジニアリング会社やコンサルタント会社の550余名の専門家が集い、コンサルタント業務の課題と傾向、ビジネスの機会について議論を行いました。日本からはAJCE((社)日本コンサルティング・エンジニア協会)に属する企業から、あるいは個人として30名のコンサルティング・エンジニア(CE)が参加し、当社からは小川義忠が参加しましたので、ここにFIDIC 2006 ブダペスト大会について紹介します。

FIDICとは

FIDICは独立・中立の立場を保持する各国のコンサルティング・エンジニア協会(日本ではAJCE)を会員とする世界的に権威のある連盟で、1913年にベルギーで設立されました。FIDICはスイスのジュネーブに本部・事務局を置き、現在75ヵ国の国別協会が加盟し、傘下の会員企業数は約35,000社にのぼり、コンサルタント企業間及び関連業界との連携によるCE業務の強化と拡大を支援しています。

FIDIC 2006 ブダペスト大会

FIDIC 2006大会は2006年9月24～27日までの日程で開催されました。大会の主要行事は、基調講演とテーマ別のワークショップであり、これにアフターファイブのソーシャルイベントが用意され、仕事と楽しみがバランス良く配置されていました。

基調講演では、フラナガン教授(英国)から、21世紀の課題として変化の速さが挙げられました。情報伝達とITの進展、ビジネスのグローバル化、開発途上国の爆発的な人口増・既開発国での高齢化の進行による住宅供給や都市化の要望の高まりです。一方、この業界としては、BOT^{注1)}やPPP^{注2)}といった新たな調達方式に直面しており、施設のライフサイクルにおける性能が重要視される方向にあること、さらには、社会資本整備の財源は公的財源から私的財源に移行するであろうことが示されました。

これらの課題に対し、人的資源が成功への鍵であり、企業間の連携とアウトソーシングの形を選択することによって技術的空白を埋めるという革新的な手段を見出すことができる会社が最も速く成長すると述べられました。また、今後のコンサルティング業務については、顧客に対してリスクの評価と管理を助言するという重大な役割が増大すること、そして、その報酬の多寡は調達されるサービスの質と革新性が反映されたものとなることから、コンサルティング・エンジニアが自らのプロフェッションに誇りを持つようにとの呼びかけがありました。

会議では、9つのワークショップが開催され、「2020年のコンサルタント企業はどのようになっているか」、「コンサルタントの機能の変化はあるのか」など、コンサルタント業務の課題と傾向、機会について議論が行われるとともに、コンサルタント会社が今日必須とされるテーマである品質保証、リスクマネジメント、プロジェクトの資金調達、コンサルティング・エンジニアの能力開発、業務の責務と保険などに関する優れた検討事例が紹介されました。

この会議において、コンサルティング・エンジニアが過去の単なる設計担当者から、顧客の信託を受けた相談相手(trusted advisor)になりつつあるということが示されました。また、若い専門家に対しては、技術のこのみを考えるのではなく、それを乗り越えて、業務の戦略的、経済的側面に思いをめぐらすよう勧められました。

おわりに

わが国においても、社会資本整備に関する制度としての契約制度や品質保証、業務の瑕疵責任と保証制度等に急激な変化が生じています。社会の持続的発展のためには、コンサルティング・エンジニアが活躍できる環境を整える必要があります。FIDICが世界標準としての契約約款などを示すことによって、各国でのその動きを支えることに大きな期待が寄せられていることを強く感じました。

注1) BOT(built-operate and transfer)とは、施設を建設して一定期間運営した後、引き渡す方式。

注2) PPP(public private partnership)とは、公的部門による社会資本の整備・運営を、公共と民間の協力により効率化しようという政策手法。